

厚生労働副大臣退任時の挨拶

(2012.10.4)

厚生労働省の皆様。一年間、小宮山大臣の下で大変お世話になりました。私は35年前に政治の世界に入り、15年かかって国会に辿り着いた人間。政府の中で仕事をするのはまさに想定外。幸せな日々が過ぎせました。心から感謝しています。

この一年の間で最も大きな思い出は社会保障と税の一体改革。皆様方と力を合わせて取り組み、8月10日、良識ある自民党、公明党の皆さんにも賛同頂いて成立したことは大きな喜びでした。日本は資源のない国。日本にあるのは人、人材です。日本の将来を考える時、国民が能力を開花できる状況、安心して暮らせる状況をいかにつくるかがポイント。社会保障や教育や雇用・労働法制など、人間を大切にする状況を作ることが大きな課題。今日、社会保障のセイフティネットがほころび、きずなが希薄化。社会保障の再構築が必要。財政状況も厳しい。90兆円の予算の内、10兆円が年金、10兆円が医療、10兆円が生活保護や障害者福祉など、30兆円が社会保障の予算。しかし、その半分以上が借金。このような状況は放置できません。今後とも、医療、年金、介護、子育て支援、その他厚生労働各分野における国民の幸せを求めた改革の推進にご努力頂きたい。

また、この一年間痛感したことは、厚生労働行政の幅の広さ。私も10年ほど厚生労働委員会に所属してきましたが、底が浅く、幅も狭かったと反省。今後、5年間程かけて厚生労働行政を勉強し直し、次に来る時には、皆様方に答弁を作ってもらうことなく、国会待機も早めに終わって頂き、ワークライフバランスが保てるように。その時まで暫しお待ち頂きたいと思います。

私が座長として取り組んだ課題の内、厚生年金基金の問題は、被用者年金制度において、支え合いの公的年金制度の上に裁量性を持った企業年金を作る、その交通整理が必要。また、今まで谷間に置かれてきた難病対策には、体系だった政策実現が必要。いずれも来年の通常国会での法案提出が目標。ハードルは高いが一体改革と同様、民主党政権であろうと、自公政権であろうと答えを出していかなければならない課題。今後とも、これまでの方針で取り組んで頂きたい。

最後に、厚生労働の意義。厚生は生の生たる所以は、生活の生、人生の生、生命の生、衛生の生、生身(なまみ)の人間の生(なま)。それを厚くすることが厚生労働の意義。また、労働の「働」、働くという字は、にんべんに動く(人が動く)と書きます。これは、働くということがいかほど人間にとって基本的なことであるかを示しています。厚生労働行政も政治も幸せの追求が本質。幸せを追求するには、人間が多く時間を費やす働く部分の幸せ度をいかに高め得るかが大きな課題。

「厚生労働」に込められた思い、あらためてご認識を。厚生労働行政、公務員を取り巻く状況は厳しい。しかし、確固たる厚生労働行政あってこそ、国民の幸せ、国民の生活・暮らしの安定、社会的公正がある。そのことに確信と誇りを持ってご尽力下さいますよう、お願い申し上げます。これからも皆様方とともに頑張っていきたい。心から感謝申し上げます、ご挨拶と致します。